

## なばな類（秋播き秋冬穫り・秋播き春穫り）

### 栽培暦

作型	月	8	9	10	11	12	1	2	3	4
秋播き秋冬穫り				—————	—————					
秋播き春穫り			—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————
ハウス冬穫り				—————	—————	—————	—————	—————		

### 栽培の特徴とポイント

低温感応後に抽だいする花茎と葉を収穫する。収量を上げるためには、株を充実させることが重要である。株の充実が悪い場合や、収穫適期を過ぎると品質、収量が低下する。また、早播きしすぎると病虫害が発生しやすく過繁茂となり、品質が低下する。

### 品 種

早生品種：秋華（タキイ）、早陽1号（サカタ）、CR京の春（丸種）。

晩生品種：花飾り（サカタ）、冬華（タキイ）。

くきたち：在来種。地域によっては、「ふきたち」、「おりな」と呼称されるものもある。

早生品種は秋冬穫りに、晩生品種及び「くきたち」は春穫りに向く。ハウス栽培の場合、継続出荷するために早生と晩生を組み合わせるとよい。「秋華」は極早生で、最も早くから収穫できる。「CR京の春」は根こぶ病抵抗性を持つので、根こぶ病対策が必要な場合に使用する。

### 本ば管理

#### 1 ほ場の準備

3年以上アブラナ科作物の作付けをしていない、肥沃で排水良好なほ場を選ぶ。

#### 2 施肥（施肥例参照）

堆肥、苦土石灰、そさい3号を全面散布し、耕起する。砕土はできるだけ細かくする。ハウス栽培の場合は、肥料が残存している可能性があるため、土壌診断を行って、施肥量を減らす。

施肥例（10a 当たり、kg）

肥料名	基肥	追肥		成分		
		1回目	2回目	N	P	K
完熟堆肥	2000					
苦土石灰	150					
そさい3号	80			12	12	12
燐加安S540		20	20	6	5.6	4
合計				18	17.6	16

### 3 畝立て及び播種

栽植密度は畝幅 120～160cm×株間 30cm×2条とする。畝高は水田転換畑の場合、20cm以上とする。播種は9月に入ってから行う。早く播きすぎると、コナガ、ヨトウムシ、アオムシ等の被害を受けやすい。また、生育が過剰となり、特に春穫りの場合、積雪下での傷みがひどくなる。一方、遅く播きすぎると、発芽率の低下や株の充実不良となる。1箇所に3～4粒播種し、軽く覆土し鎮圧する。種子の必要量は3～4dlである。

苗をつくる場合、秋冬穫りでは9月上旬、春穫りでは10月上旬にセルトレイ又はペーパーポット(128穴で40～50枚/10a)に播種し、25～30日間育苗し、本葉3枚程度で定植する。1セル当たり2～3粒播きとし、種子の必要量は約40ml/10aである。

### 4 間引き

本葉が2～3枚(播種後20日)になったら2本立ちに間引き、定植後、本葉が4～5枚になったら1本立ちとする。

### 5 その他(ハウス栽培での栽培のポイント)

ハウス栽培では、低温に感応させるために12月上旬まではサイドをできるだけ開放する。1～2月になると、凍害を受け、奇形、葉の黄化等の症状が発生しやすいので、不織布や透明ポリフィルムによるトンネル、べたがけなどにより保温し、凍害を受けないように工夫する。

## 収 穫

伸長してきた花茎部を順次収穫していくため収穫作業は長期にわたる。最初に、主枝の先端にできた花茎部を摘心収穫し、主枝の収穫から約15～20日後に、伸長してきた側枝を収穫する。花蕾部が葉先と同程度の高さまで盛り上がってきたときが収穫適期である。花茎長20～22cmを基準に収穫するが、主茎の場合、花蕾が葉に埋もれており、花茎長が分かりにくいので、葉長25～28cm(花茎長20～22cm)を基準に収穫する。

## 病虫害防除

- 根こぶ病 : 3～5年に1回の輪作が望ましいが、連作が避けられない場合は、移植栽培、抵抗性品種の利用、予防薬剤の施用等をするとよい。
- 花腐細菌病 : 花蕾が黄色から黒褐色となって腐敗する。11～12月の降雨量が多いときに発生する傾向がある。抵抗性に品種間差異があるので、抵抗性の高い品種を利用する。
- 白さび病 : 葉の裏面に白色の斑点をつくる。薬剤による防除や、被害葉の早期発見及び除去に努める。
- 灰色かび病 : ハウス栽培で発生しやすい。葉や花蕾に灰色のカビをつくる。多湿条件で発生しやすいので、できるだけ換気をする。被害を受けた葉や花蕾は、発見次第取り除き、ほ場に残さないようにする。

## 販売のポイント

霜が降りて、凍結している時は収穫を控える。鮮度の低下が早いので、なるべく早く出荷する。